

ドッグラン利用者の施設選定に関する研究 ——埼玉県を事例に——

天野 宏 司
野村 沙 紀

[キーワード]

ドッグラン，選定基準，利用者，移動性，レクリエーション

1. はじめに

一般社団法人ペットフード協会が1994年から実施している「全国犬猫飼育実態調査¹⁾」によると、2012年の犬の飼育頭数は11,534千頭と試算されている。この頭数を厚生労働省の発表する登録犬数と比較すると、おおむね倍の数値となる(図1)。例えば、2011年度の登録犬数6,852千頭に対し、飼育頭数は11,936千頭と、1.74倍に達する。協会による「全国犬猫飼育実態調査」は、過去10年に登録を行った経験の有無も聞いており、これによると、非登録者が18.7%含まれた上で飼育頭数を構成している。さらに、ペットショップなどで販売されている幼犬の場合、買い手が定まる前は登録されていないと思われること、同調査の50,000人に及ぶ回答者群は、インターネットを通じた調査に「応じている層」で構成されていることなどを考えると、協会の調査はより実態に近いと考えられる。

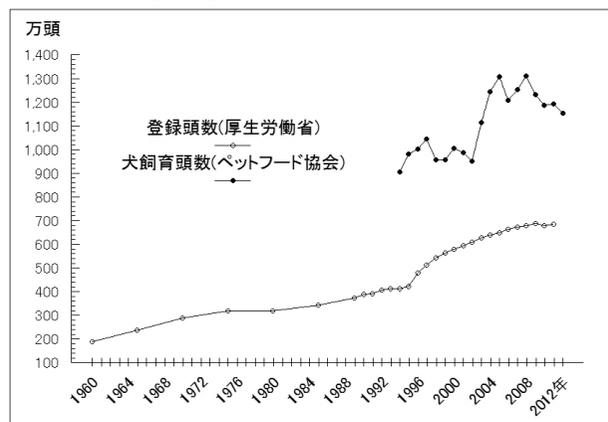


図1 飼育される犬数の推移

一般社団法人ペットフード協会「各年次 全国犬猫飼育実態調査」・厚生労働省「犬の登録数と予防注射頭数等の年次別推移」より作図

この飼育実態調査によると、近年の傾向として犬の室内飼育が一般化していることが指摘されている(図2)。元来活動的な動物である犬を室内飼育する場合、恒常的に運動量が不足し、犬のストレスなどにも繋がると考えられる。また、飼育者の側に注目すると、50代・60代の飼育者は全体の48.64%を占めている(図3)。この調査自体が「20～69歳の男女個人」を対象としているため、実際にはより高齢者層による飼育が、日本社会の高齢化現象の進行により想定される。高齢者によって飼育されている犬については、毎日の散歩が不十分であったり、若年・壮年層においては、遠距離通勤の一般化や、夫婦共稼ぎ世帯の増加、あるいは就業形態の多様化・変化により、毎日定期的に散歩に連れていくことが困難となっていることが考えられる。このため犬を自由に遊ばせ、ストレスの発散や、運動不足を解消させるための施設として、「ドッグラン」に対する需要の増加が想定されよう。

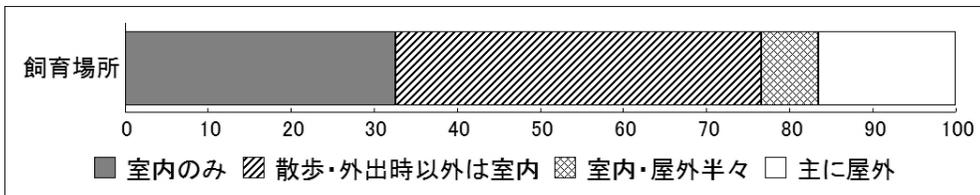


図2 犬の飼育場所

(一般社団法人ペットフード協会「2012年全国犬猫飼育実態調査」より作図)

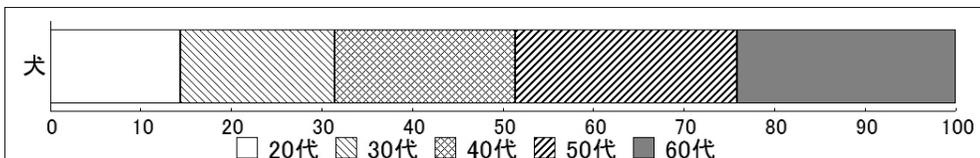


図3 世代別犬の飼育

(一般社団法人ペットフード協会「2012年全国犬猫飼育実態調査」より作図)

このような需要増という社会的背景を受け、ドッグランそのものに対する研究蓄積も進んできた。ドッグランに関する研究は、ドッグランが日本に普及する過程の中で生じたさまざまな問題への対応に追われ蓄積してきた。たとえば塚本沙織(2002)は、都市部にドッグランが普及する以前においてしばしば公園内で発生する犬の飼育者と一般の利用者間の軋轢について分析し、双方の共存を促すために犬と飼い主が社会的訓練を受ける場として公園にドッグランの設置・普及を求めた。ここで言及される軋轢は、フンの放置・無駄ぼえ・ノーリードによる放飼などを指す。これは、ドッグランの設置が充実していく過渡的な研究であり、都市計画・公園整

備に関する研究で、公園の整備計画の中にドッグランの設置を求めようとする立場のものと位置づけられ、論旨としては、ドッグランの必要性を訴えるために公園などの公共空間における問題行動をドッグランの設置によって解消しようとしたものである。他にも、青戸好久(2004)は、駒沢オリンピック公園および神代植物公園にドッグランを仮設した社会実験の成果を報告し、公設ドッグランの導入に関する課題の整理を行った。このような導入報告は、小国 彩(2002)による武蔵丘陵森林公園の、あるいは三宅哲也(2008)の、高速道路内の鹿野サービスエリアに設置されたドッグランに対する論考などがこの系統に属す。

ついで、ドッグランの設置が充実してくると、ドッグラン内部での、犬あるいは飼い主の問題行動の顕在化を危惧した研究や、ドッグランのより適切化を希求する立場での論考が蓄積されてきた。前者の立場からは、小室ゆめ以・甲田菜穂子(2009・2010)の一連の研究がドッグランの利用者側に対する観察結果に基づいて問題点を整理したのに対し、代田久美(2007)は利用規則の分析や管理者に対するインタビュー調査から、施設管理者の側が抱える問題点を抽出した。後者の立場からは、横松・藤崎(2009)が一口に「ドッグラン」と言ってもドッグランの形態や運営方法に多様性があることを指摘し、これを整理することで今後の改善策を抽出した論考や、関西・鱒淵(2010)が、利用者の観察に基づきドッグランの構造設備の改善案を提言した。このような施設整備計画の方向性を明らかにするために吉田・川瀬(2008)は、選択モデル分析を行い「新規に有料のドッグランを設ける」との設定の中でドッグラン利用者の選考に関する志向性を把握しようとした。これらの研究はいずれも、都市工学あるいは造園学の立場から、「どのようにしてより良いドッグランを形成するか？」との視点に立っているものであり、後背に控えるドッグラン利用者自身に対する分析を指向していない。

わずかに吉田・川瀬の論考が、利用者が「数あるドッグランの中から何を基準に利用施設を選定し、何を目的として利用するのか？」という観点に立つものであるが、この研究の本旨は「Graphics と Text による選択確率の変化に関する考察」にあり、ドッグラン利用者の選定基準を明確にしているとは言いがたい。あるいは、「どのような範囲から利用者が集まるのか？」といった空間的把握については先行研究では等閑視されている。そこで本研究は、ドッグラン利用者の利用実態を把握し、その選定基準をあきらかにしようとするものである。

全国のドッグランを網羅するような、公的な機関作成の情報は見つけることが出来ないものの、いくつかの情報サイトで全国のドッグランの紹介がなされている。

しかしながら、各サイト運営者の意向や、情報掲出の基準に差違があるため必ずしも一致した数字とはなっていないが、およそ全国では650~700ヶ所程度のドッグランが存在していると推測出来る。図4は(有)ドギーエンタープライズ HP「全国ドッグラン情報」²⁾に依拠した、2011年8月1日現在の都道府県別分布図である。これによると、東京都・埼玉県・神奈川県・千葉県や愛知県、大阪府・兵庫県などの大都市圏・人口集中地域に多くドッグランが集中することがわかる。一方、同じ資料を、人口100万人あたりの施設数に再集計した図5によると、必ずしも人口集中地域でドッグランの密度が高くなるわけではないことがわかる。

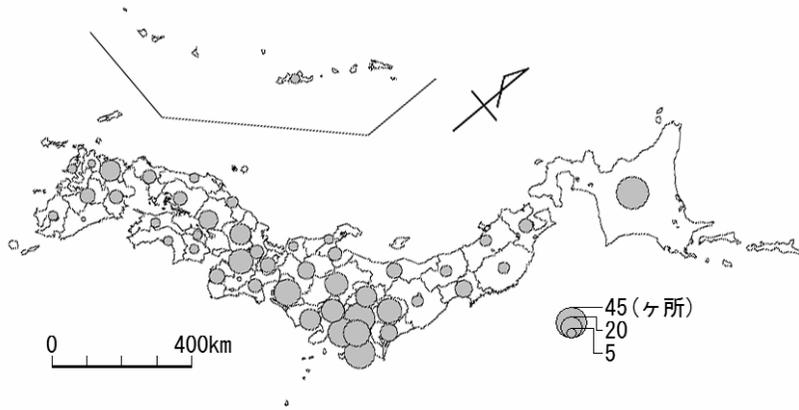


図4 全国におけるドッグランの分布

(有)ドギーエンタープライズ HP「全国ドッグラン情報」より作図)

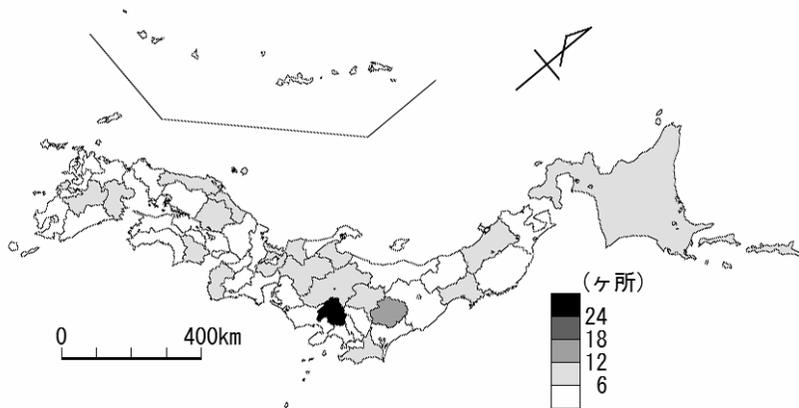


図5 人口100万人あたりのドッグラン密度

(有)ドギーエンタープライズ HP「全国ドッグラン情報」より作図)

本研究では、ドッグランが41ヶ所と数多く存在し(図6)、かつ比較的密度の高い地域として埼玉県を対象とし、ドッグラン利用者の実態把握と、施設選定に関する分析を行う。

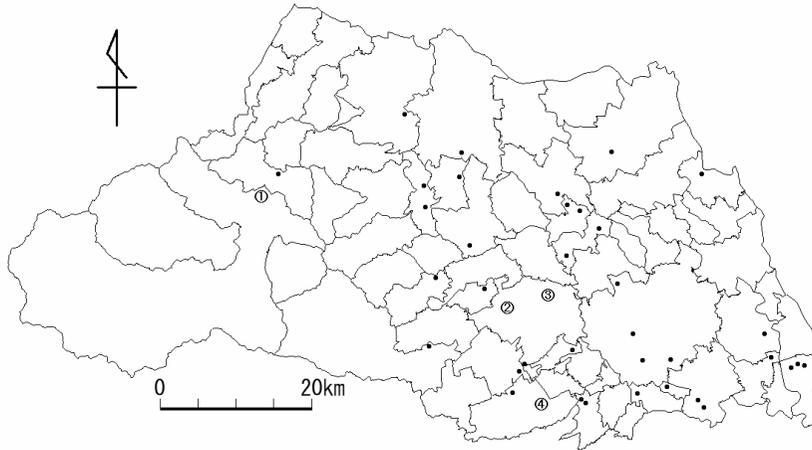


図6 埼玉県内におけるドッグランの分布

(①～④は表1に対応)

2. 調査対象施設と調査の概要

1) 調査対象施設

本論では、ドッグランを専有面積の広狭と、利用料金の多寡を軸に大きく4分類して考察を加える。一つ目は、有料で、面積が広いタイプのドッグランである。これを Type I とする。Type II は、有料ではあるが、面積が狭いタイプのドッグランである。Type III は、利用料金が原則無料で、面積の広いタイプのドッグランで、このタイプは公園内などに併設されるものがほとんどである。Type IV は、利用料金が原則無料で、面積の狭いタイプである。以上の4分類に、埼玉県内41ヶ所のドッグランを分類したものが図7である。本研究では、この4分類を代表する4施設を抽出した(表1)。各施設概要は以下の通りである。

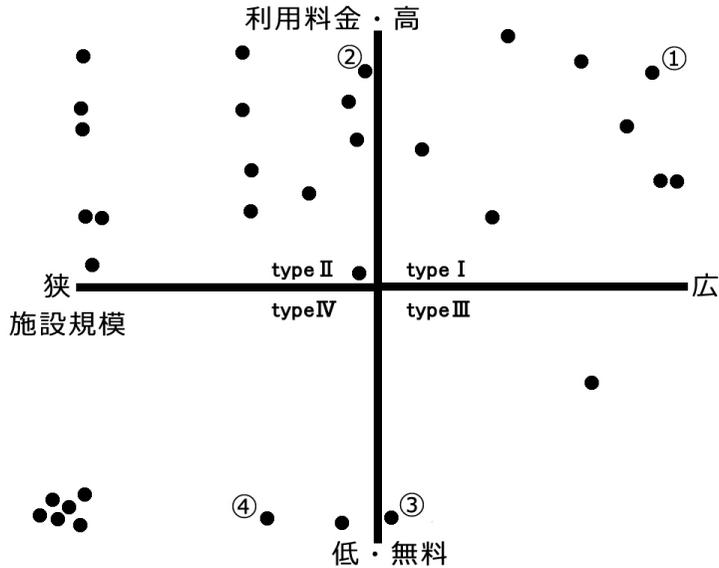


図7 埼玉県内におけるドッグランの類型

(①～④は表1に対応)

表1 調査対象施設とアンケートの概要

施設名	住所	会員登録料・年会費	1回あたり利用料	面積(m ²)	調査期間	データ数(枚)
① スパ・ドッグズランズ秩父	秩父市小柱	¥11,000	¥1,000～	3,000	10月5日～11月4日	50
② 川越水上公園ドッグラン	川越市池辺	¥13,000		1,822	10月13日～11月11日	27
③ 航空記念公園ドッグラン	所沢市並木			1,800	10月20日・10月25日	91
④ 笹原町緑地ドッグラン	川越市鴨田			1,440	10月26日・10月27日	41

Type I・スパ・ドッグズランズ秩父：専従管理者が駐在し、利用に際し1年以内のワクチン接種証明書，狂犬病予防接種証明書を持参することが必要。入会金10,000円に加え年会費1,000円と，1回ごとの利用に1,000円～の利用料を要する。犬用の100%源泉掛け流し天然温泉が併設されていることが特徴である(以下，秩父)。

Type II・川越水上公園ドッグラン：川越水上公園の敷地内にあるドッグランで，専従管理者が駐在する。年会費12,000円に加え，登録料1,000円を要する。利用には狂犬病予防接種、ワクチン接種を要し，登録時には愛犬の写真，飼い主の身分証明証，鑑札などの書類を必要とする(以下，水上公園)。

Type III・航空記念公園ドッグラン：航空記念公園の敷地内にあるドッグラン施設で，ボランティアと利用者の協力によって開設され，管理者は不在である(以下，航空公園)。

TypeⅣ・笹原町緑地ドッグラン：川越運動公園の南側に位置し、笹原町緑地の芝生部分を利用したドッグラン施設で、川越市によって設置された公設ドッグランの先進事例である。施設提供のみの管理人不在型施設で、利用できる人は川越市に在住・在勤・在学の者に限られている（以下、笹原）。

以上の4施設を対象に、各施設利用者に対するアンケート調査を実施した。次節において、その調査概要を述べる。

2) 調査の概要

今回の調査にあたって、対象施設4ヶ所の利用者にアンケートを行った。アンケート項目は、①個人属性に関する項目（居所・年齢・性別など）、②犬の飼育状況に関する項目（犬種・犬齢・一週間の散歩の頻度・居宅の状況）、③施設選定に関する項目（来場手段・情報入手手段・利用目的・選定理由・利用回数・利用頻度など）に加え、④施設に対する満足度・感想・意見などである（図8）。

アンケート調査は、配布用紙方式調査と対面聞き取り式調査の2種類の方法で行った。管理者の常駐型施設である、スパ・ドッグズラン秩父と川越水上公園ドッグランでは管理人へ依頼し、来場した利用者への配布用紙方式で任意に回答を求めた。一方、管理人が不在の航空記念公園ドッグランと、笹原町緑地ドッグランでは、土日祝日と平日の各1日を対象に、対面聞き取りを行った。以上の結果、表1に示す計209通の回収を得た。以下、次章でその分析を行う。

ドッグラン利用に関するアンケート

駿河台大学 野村沙紀

卒業研究において「ドッグラン利用者の満足プロセスに関する研究」をするためアンケート調査を実施しています。是非ご協力お願い致します。

Q1:どちらにお住まいですか？

_____区・市・町・村 _____歳 男・女

犬種 (_____) ・ _____歳

Q2:ここまでの交通手段 ①徒歩 ・ ②自転車 ・ ③自動車 ・ _____
 ④電車 ・ ⑤その他 (_____)

Q3:このドッグランをどこで知りましたか？

①ポスター (チラシ) ・ ②HPなどのインターネット ・ _____
 ③知人から ・ ④情報誌 ・ ⑤たまたま通った
 ⑥その他 (_____)

Q4:利用目的

①犬のストレス発散 ・ ②犬同士のふれあい ・ ③飼い主同士の情報交換
 ④その他 (_____)

Q5:この場所を選んだ理由[複数回答・可]

①家から近い ・ ②施設の充実度 ・ ③犬づきあい ・ ④安全性の高さ
 ⑤無料だから ・ ⑥利用料が安いから ⑦近所に犬を遊ばせる場所がない
 ⑧その他 (_____)

アンケートは裏面にも続きます・引き続きご回答下さい。

アンケートは裏面から続いています。

Q6:利用回数・利用頻度 _____ 回目 / 毎日・[週・月] _____ 回

Q7:利用時間帯/滞在時間 am-pm _____ 時 / _____ 分

Q8:1週間の散歩の頻度 ①毎日 ・ ②週 _____ 回

Q9:おすまいの様子についてお聞かせ下さい

①マンション/アパート ・ ②一軒屋(庭無し) ・ ③一軒屋(庭付き)

Q10:このドッグラン施設に対する満足度を、次の尺度でお答え下さい。

5. 非常に良い 4. 満足 3. 普通 2. やや不満 1. 不満

Q11:このドッグランにまたお出でになりますか？次の尺度でお答え下さい。

5. 是非来たい 4. また来たい 3. 機会があれば 2. 来たくない 1. 絶対来ない

Q12:このドッグランへの感想やご意見などがございましたらお書きください。

回収しましたアンケート結果は、卒業研究のみに利用し、それ以外の用途には使いません。
ご協力ありがとうございました。

アンケートは裏面から続いています。

図8 アンケート票

3. 飼育とドッグランの利用実態

1) 利用者の属性と飼育の実態

ドッグランを利用している人々の年齢・性別の構成を図9・図10に示した。男女比は施設間に若干のばらつきがあるものの、ほぼ1:2の割合で女性が多い。一方、世代別では施設間の差異が大きく、秩父では60代以上の層がほとんど出現しないのに対し、水上公園・航空公園では20%程度が高齢者層である。

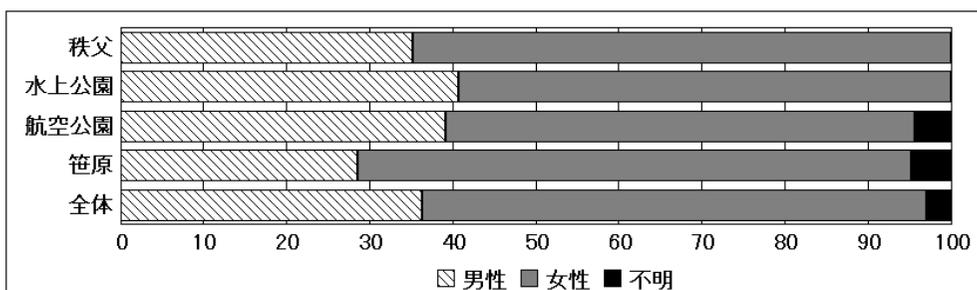


図9 ドッグラン利用者の性別構成

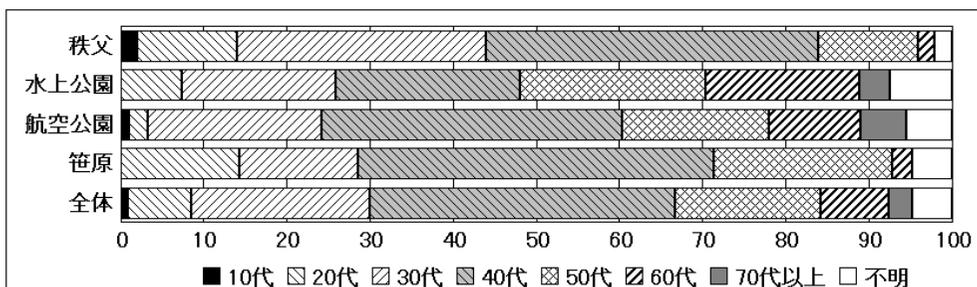


図10 ドッグラン利用者の世代別構成

また、彼らの飼育の実態について、犬種(図11)・居住形態(図12)・散歩の頻度(図13)を示した。近年の飼育傾向として小型・室内犬の飼育熱の高まりが言われている。これを裏付けるようにマンション・庭なし一戸建てと、室内飼育が想定される居住形態が卓越する笹原・秩父では小型犬の割合が60%を超え、逆に庭付き一戸建ての卓越する水上公園・航空公園では、大型犬・中型犬の割合が50%程度を占めている。

犬が必要とする運動量は、犬種によって異なるが一般的には体躯が大きな犬種ほど多くの運動を要する。大型犬で、1日に1時間程度の散歩を行うことが、小型犬の場合は10分程度が推奨される。これを反映してか、散歩の頻度について水上公

園・航空公園は他に比して若干ながら散歩に出かける頻度が高い。一方、秩父ではその頻度が少ないことが確認される。

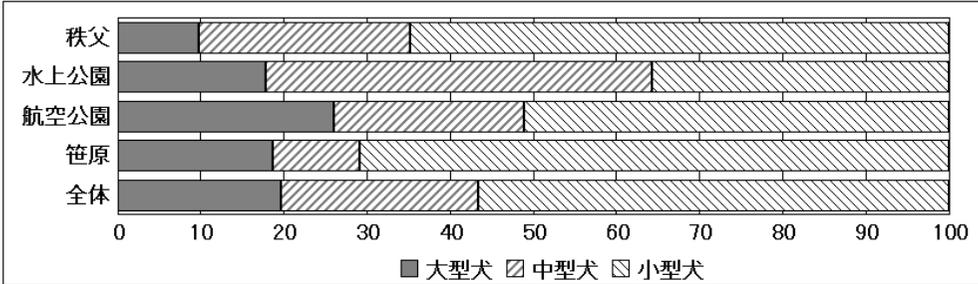


図11 ドッグラン利用者に使用される犬種別構成

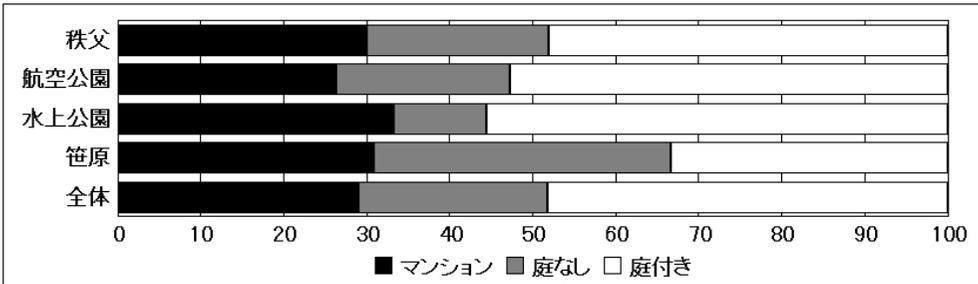


図12 ドッグラン利用者の居住形態

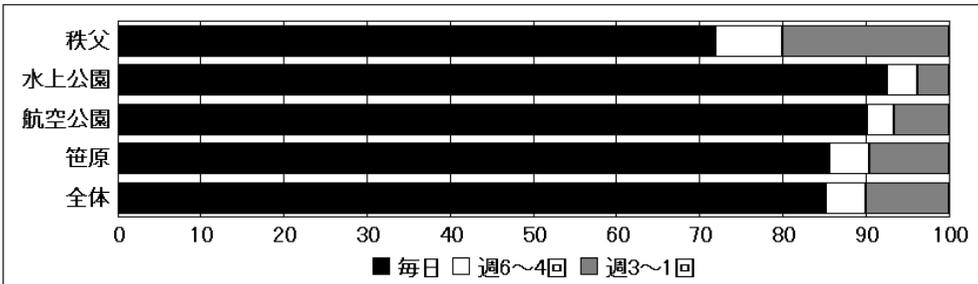


図13 ドッグラン利用者の散歩の頻度

2) ドッグランの利用実態

各利用者の訪れたドッグランの利用経験(図14)・利用頻度(図15)をそれぞれ施設毎に示した。

利用経験においては、秩父を除き過去に相当回数の利用歴を有していることが読み取れる。これに呼応して利用の頻度も、航空公園・水上公園では、毎日～週の大

半と、頻回に利用する傾向が読み取れ、笹原では頻度が若干落ちるものの毎月来訪して利用されていることがわかる。一方秩父では、無回答が圧倒的多数を占めた。そもそも初めての利用者が多い秩父の場合(図14)、頻度を問うた設問には回答のしようが無くこのような結果になった。秩父の場合、図14・図15から、毎日の散歩のついでに立ち寄る施設ではないことが明らかとなる。すなわち、ドッグランは、その利用実態から考察するに、日常的な利用対象となる施設(水上公園・航空公園)と、年に数回程度の利用をする施設とのふたつの階層的な構造を有することがわかる。

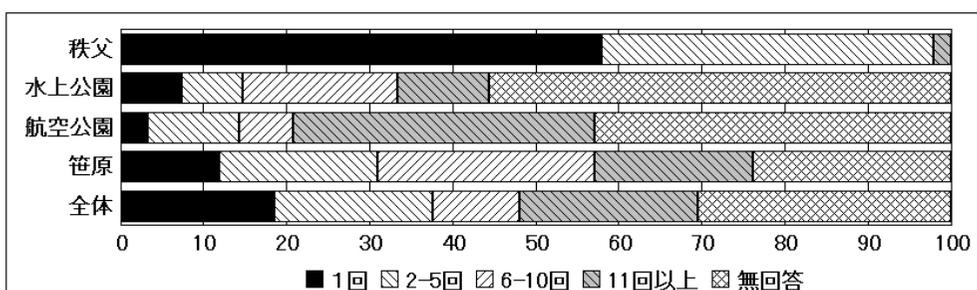


図14 当該ドッグランの利用経験

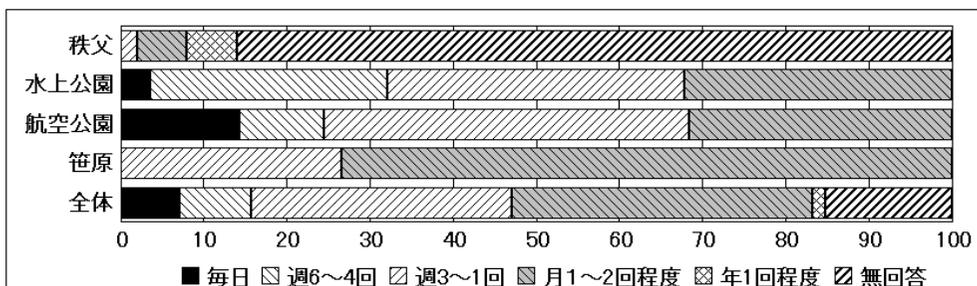


図15 当該ドッグランの利用頻度

図16は、各施設ごとの来訪手段を示したものである。これを見ると、車を用いてドッグランまでアクセスし、利用している事例が大半であることがわかる。つまり、毎日のように散歩に連れ出しているにも関わらず(図13)、多くのドッグラン利用者がわざわざ車を利用して、ドッグランまで来場していることに、ドッグランの需要が相当数潜在していることを示そう。すなわち、散歩とドッグラン利用は、切り離された別の行為と認識されていると捉えることができる。日常的に頻回な利用がされる水上公園・航空公園では、徒歩で来場し、散歩とドッグラン利用の合一が20~30%程度確認されるが、これは利用頻度が高い層とほぼ一致するが(図15)、むしろ

この合一の方が例外的な事例のようである。

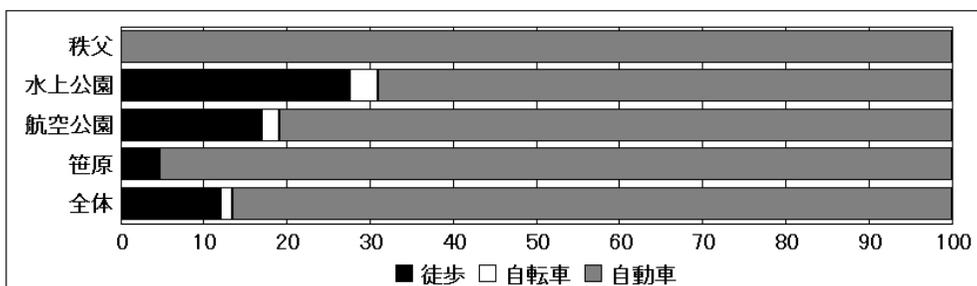


図16 当該ドッグランへの来訪手段

図17は、各施設の滞在時間を示した。図17によると、利用料金の徴収がある秩父・水上公園では滞在時間が長く、無料の航空公園・笹原では相対的に短いことが確認される。水上公園・航空公園ともに、日常的な利用に供される点では共通しているものの、滞在時間の点では明らかに傾向が異なり、「利用料」支出に相応の滞在時間が反映していると考えられる。

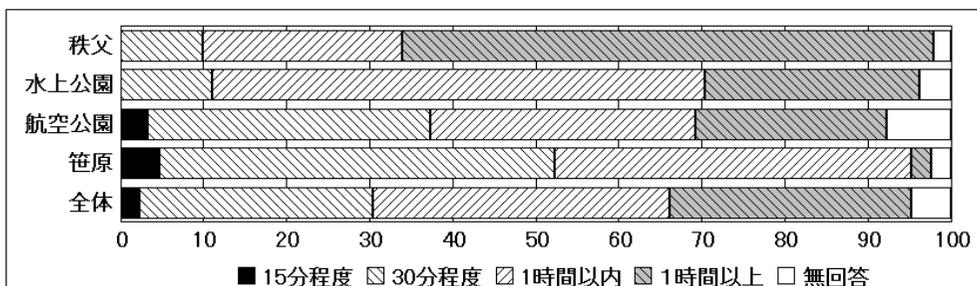


図17 当該ドッグランでの滞在時間

4. ドッグランの選定理由と集客圏

1) ドッグランの選定理由と情報源

前章では、散歩とドッグラン利用は切り離された行動であることが確認され、車を介して来場するケースが大半であることが明らかになった。彼らの大半は毎日恒常的に、犬を散歩させていることから、ドッグランの利用目的は、必ずしも「散歩ができないこと」を解消することを目的にしていることがわかる。では、彼らドッグラン利用者は、何を目的としてドッグランを利用し、どのような選定基準で利

用するドッグランを選んでいるのであろうか。

図18は、ドッグランへの来訪目的を図示したものである。これによると、いずれの施設でも、犬のストレス発散が主目的であり、それについて犬同士の触れあいを目的としてドッグランを利用していることがわかる。すなわち、散歩では引き綱(リード)を着用することが義務づけられているが、これを外し、ノーリードで犬を自由に遊ばせることができる施設としてドッグランを利用し、ついでほかの犬との接触を促し、飼い犬の社会性を涵養する場としてドッグランが期待されていることがわかる。これに付随して、飼い主の側にも飼育情報の交換・レクリエーション機能が求められている。

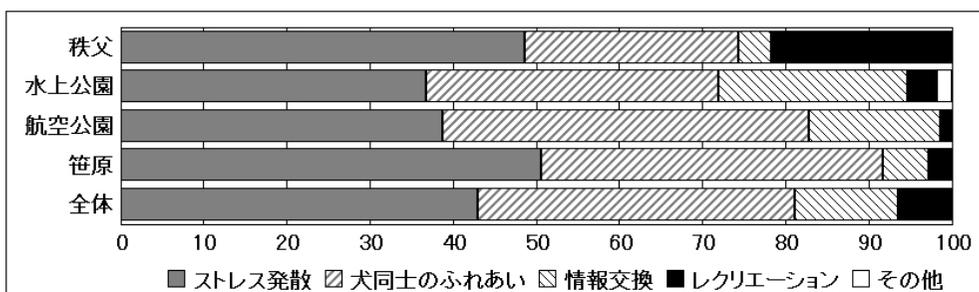


図18 ドッグランへの来訪目的

図19は、ドッグランの選定にあたり利用した情報源について示す。これによるとどのドッグランでも情報源として重視されているのがHPなどのインターネットを通じた情報である。水上公園・航空公園のように、日常的な利用と、他の犬・飼育者との交流を求めるタイプのドッグランにおいては、これに知人を通じた口コミの情報が重視されている。一方、「たまたま」見つけたとの回答もあり、ドッグランの周知・広報活動には、まだまだ未成熟な部分が存在すると思われる。特に、情報誌を介した情報入手は極小な割合しか存在しない。反面、犬の飼育頭数やドッグランの需要増において、その施設が発信する情報以外に頼るべき情報源がほぼなく、依然として「たまたま」見つける偶有性に依存しているのであるとすると、全国のドッグラン情報を網羅するような情報誌市場の創設が検討されるべきであろう。図16で明らかなように、車での移動を伴う利用が一般化している以上、利用に際した距離の制約は小さいと考えられる。

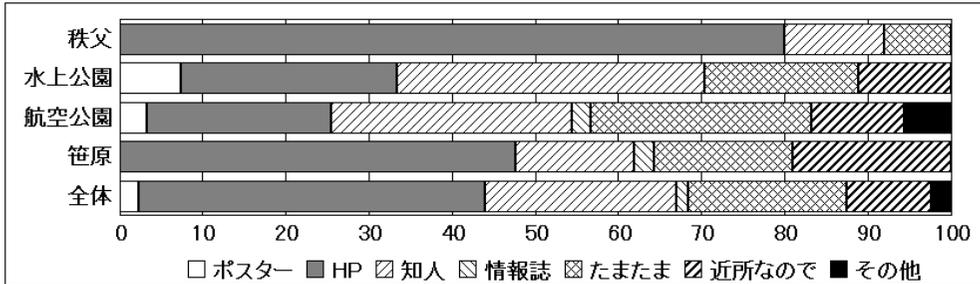


図19 ドッグラン選定の情報源

図20に、彼らドッグラン利用者の選定理由を示した。選定理由において、利用料金が無料である航空公園・笹原では居宅との近接性が重視されている。一方、有料施設である秩父・水上公園では施設の充実や安全性が重視されている。また、図18で示されるように、犬同士のふれあいはドッグラン利用の重要な目的のひとつであった。これを反映して、日常的な利用の対象となる水上公園・航空公園では常連利用者同士の犬つきあいを目的としている利用者が確認された。ただし、車でへのアクセスを介して利用が行われている実態(図16)の中で、「近所にドッグランがない」ことを理由に選定しているケースも10%程度存在している。散歩の途中で寄るような利用実態であれば、居宅との近接性は最重要項目たり得る。しかしながら、車で移動を介する利用が行われる中で、距離の制約は大きな障害になり得まい。では、彼らドッグラン利用者が言及する「近さ」とは、どの程度の広がりを持つのであろうか。次節で検討する。

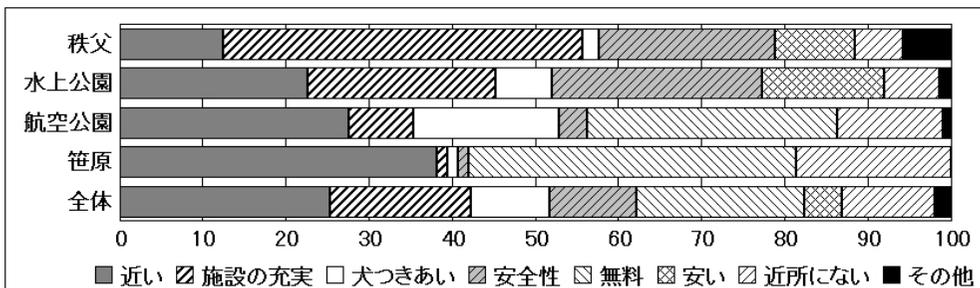


図20 ドッグランの選定理由

2) ドッグランの集客圏

前節で、ドッグランの選定にあたり重視される項目は有料施設においては施設面

の充実と安全性、無料施設においては、無料であることが絶対条件ながら、近接性が重視される傾向が確認された。しかし一方で、有料・無料に関わらず、ドッグランへのアクセスに車を介して移動をし、かつ「近くにない」ことから当該施設を選択していることがあきらかになった。車の利用を前提とすれば、徒歩での移動に比べ距離の制約は小さく、集客圏は広範に広がるであろうことが想起される。図21は、各ドッグラン利用者の居所を市町村別に集計したものである。これによると、ドッグラン利用者の車を介したアクセスをしていることが集客圏の広がりから反映していることがわかる。たとえば笹原の場合、市営の施設であるということから利用規約に「川越市に在住・在勤であること」が、規定されている。しかしながら実際には、市内在住者に限らず埼玉県さいたま市・東松山市・ふじみ野市・富士見市・所沢市にまでおよび、その半径はおおよそ10kmに及ぶことが明らかになった³⁾。同じく無料の航空公園のケースでも例外的に群馬県高崎市・東京都台東区・埼玉県三郷市など遠隔地からの来訪が存在するが、笹原と同様半径10km圏内にほぼ集約している。これに対し、有料施設の秩父では非常に広範に利用者の分布が見られ、その半径は50～80km圏に及ぶ。秩父の場合全国的にも珍しい犬専用の温泉設備が併設されており、この訴求力が広い集客圏を形成する要因となっていると考えられる。このことは自由記述欄への回答に「いつも行っている地元のドッグランよりも2倍以上の広さがあって、犬ものびのび走っていました。温泉もあって、良かったです。また来たいです。」「ドッグランでいっぱい遊ばせて、温泉に入れてきれいになって家に帰れるので本当に満足しています。家族も温泉に入れて、大満足です。」などの記述が散見され、犬・飼い主双方にとって、非日常的なレクリエーションの場としての機能が求められていることがわかる。水上公園の場合は、立地点である川越市内で利用者の分布がほぼ完結し、さいたま市・東松山市に若干の利用者が確認された。水上公園の場合、日常的な利用がなされている(図15)施設であり、かつ徒歩での来訪者が他の施設に比して多い(図16)ことから、立地地域に集中するであろう事は理解がしやすい。しかしながらこの施設に利用登録をする者の分布を示した図22によると全登録者の60.1%が川越市内在住者で構成され、上述のように日常的な利用者層で構成されていることは顕著ながら、群馬県高崎市・栃木県足利市・神奈川県相模原市のような遠隔地を始め、埼玉県南部～東部、東京都内を中心に広く登録者が分散している様子がわかる。アンケートの回収枚数が27通と少なかったこともあり、これら遠隔地の利用者が補足しきれなかったと思われる。それでも図15で確認できるように月1回程度の利用者が、30%を超え、週4回以上利用する層とほぼ

拮抗している。このことから考えると、航空公園・笹原でもより広範に利用者が拡散している可能性もあろうが、両施設では登録制度そのものが存在しないため検証ができないため可能性の指摘に留める。水上公園が広範囲に集客圏を形成している要因については、自由記述欄の記載内容から推測可能である。記述欄への記載は27通中13通あり、その中で53.8%が管理人について「犬のことをよく知っている管理人がいてくれるのが良い来やすいふんいき。」・「よく管理されていて安心して犬を遊ばせることができる。」など、徹底された管理体制に肯定的なコメントを挙げている。水上公園の場合、スタッフによりほぼ毎日、午前午後の2回にわたりブログを通じて来訪した犬の様子をアップロードしていることにより、一度訪れた飼い主に対する再訪の動機付けが強化された結果、図15に示すように水上公園の利用頻度は高まり、日常的な利用をする施設になるのであろう。また「飼い主さんの為のしつけ教室⁴⁾」・「トイプードル集まれ⁵⁾」・「ドッグラン ハロウィン⁶⁾」など、飼い主のための講座・季節のイベント、特定犬種に限った催し物などを開催したり、図23に示すような、登録された利用犬の誕生月の紹介など、様々な来訪を誘導する取組が管理者によってなされ、かつブログを通じて広報されていることも来訪のきっかけ作りになっているものと思われる。ブログのようなインターネット媒体を活用した広報活動は、距離の制約をほぼ消失させるため、結果として遠隔地から・車で来訪する利用者也包摂した集客圏を形成したと考えられる⁷⁾。

ドッグラン利用者の施設選定に関する研究
 ——埼玉県を事例に——

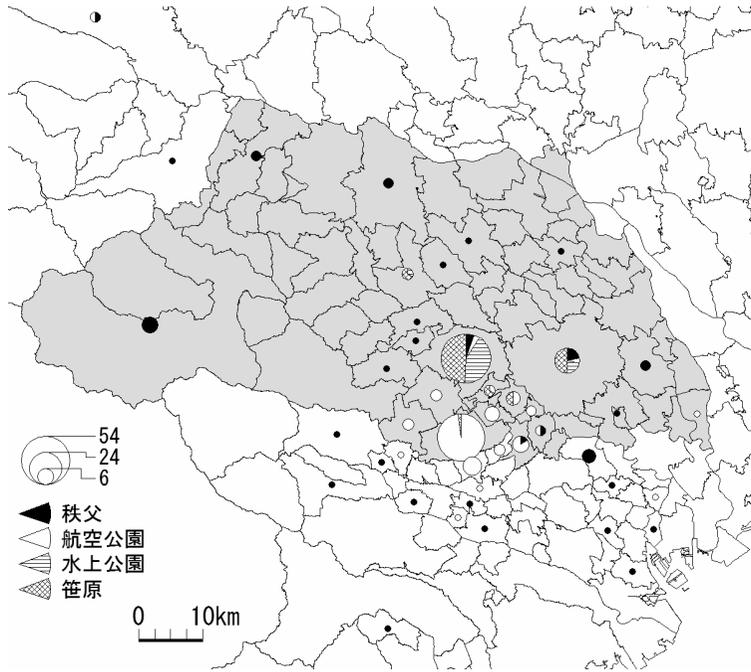


図21 ドッグラン利用者の分布

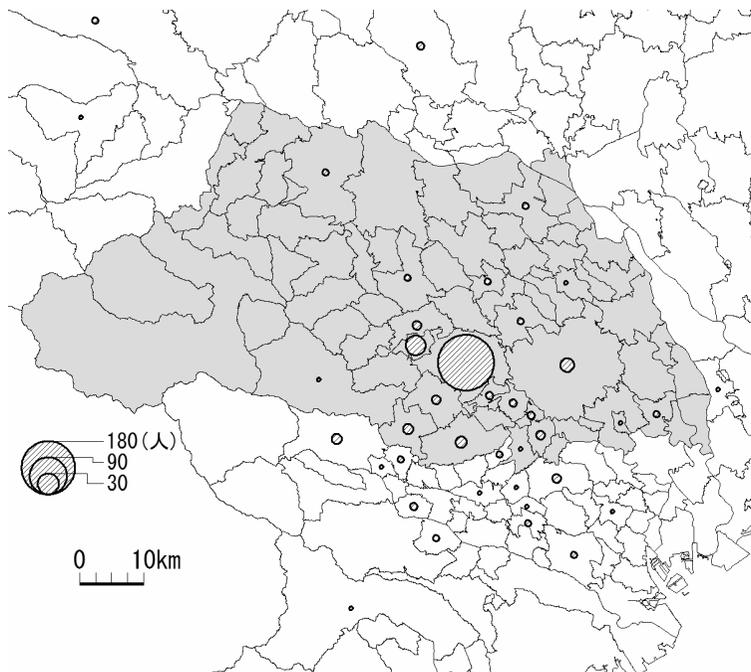


図22 川越水上公園利用登録者の分布

(施設提供資料により作図)

意の管理人といったような、その施設ならではの特質が存在する場合、さらに集客圏を広く後背に形成することが分かった。

今後の課題は2点ある。ひとつは今回取り上げた4施設は何れも人口稠密地帯には立地していない。いずれも都市内在型ではなく郊外型の施設であるため、必然的に車での来訪が多かったとの結果が導き出された可能性は排除できない。都心部の人口稠密地域に立地するドッグランとの比較が必要であろう。一方で、山梨県のように、人口100万人に対するドッグランの密度が極端に高い地域に立地する施設の場合、本研究で明らかになったように、車で・レジャーの一環として来訪するであろう施設が、首都圏の住民を後背人口として、その訪問地として機能していると考えられる。ドッグランの日常利用型・レジャー型という二面性が明らかになった本研究の次の段階として、レジャー型の集中する山梨県における調査は必要と考えられこれらを今後の課題とする。

謝辞

本研究は、2013年3月に駿河台大学 現代文化学部を卒業した野村沙紀君の卒業研究をもとに、天野がリライトしたものである。野村君の運転で各ドッグランを訪問するたびに、一再ならずサイドブレーキを引き、肝を冷やされたのは今となっては良い思い出である。調査にあたり、次に挙げる各施設・各位の協力を得た、記して感謝致します。

川越市役所 都市計画部 公園整備課(松原様)・川越水上公園ドッグラン(野原様)・スパ・ドッグズラン秩父(梅沢様)・所沢航空記念公園管理事務所(田中様) (順不同)

注

- 1) この調査は、飼育犬種・体重・登録の有無・ペットフードのタイプ・登録の有無などをインターネットを通じ50,000件のサンプル調査によって試算している。
- 2) <http://www.dogep.com/dogrun/index.html> (2013年2月17日閲覧)
- 3) このほか、図示の範囲外に新潟県新潟市在住者1件が存在する。このケースは、聞き取りの結果、ドライブの途上にたまたま見つけて立ち寄ったとのことであった。図19に示されるように、情報源として偶有性が一定割合存在していることが本例からも傍証される。
- 4) <http://blogs.yahoo.co.jp/kawagoeparks2008/37202687.html> (2013/03/20閲覧)
- 5) <http://blogs.yahoo.co.jp/kawagoeparks2008/37202660.html> (2013/03/20閲覧)

- 6) <http://blogs.yahoo.co.jp/kawagoeparks2008/37170489.html> (2013/03/20閲覧)
- 7) ややシニカルな見方をすれば、有料施設の場合、維持管理のためのコスト捻出のために収益性を確保せねばならず、このため営業活動を積極的に行い、近隣利用者市場の開拓が飽和した結果、遠隔地へと市場を拡大させたと見こともできる。しかし、無料施設である航空公園・笹原でも広範な集客圏を後背に控えており、これがドッグランの特性のひとつといえるのかもしれない。

参考文献

- 愛甲哲也・浅川昭一郎「都市の緑地における犬連れ利用者の実態と意識」ランドスケープ研究. 70(5), pp.515~518, 2007年.
- 青戸好久「計画・調査 ドッグランについて」都市公園. 164, pp.51~53., 2004年.
- 植木 修「管理・運営 都立公園のドッグランについて--マナーを守った適正な利用に向けて」都市公園. 179, pp.86~88., 2007年.
- 小国 彩「国営武蔵丘陵森林公園のドッグラン」都市公園. 159, pp.78~82., 2002年.
- 神奈川県相模原土木事務所「まち・みどりの話題 県立相模原公園ドッグラン--相模原公園における犬問題への取組み」公園緑地. 69(1), pp.31~32., 2008年.
- 関西剛康・鱒淵良人「ドッグランの利用実態にみる改善計画について」南九州大学研究報告. 自然科学編. 40, pp.39~44., 2010年.
- 公園緑地管理財団武蔵管理センター「まち・みどりの話題 愛犬とともに自然とふれあう--国営武蔵丘陵森林公園ドッグラン」公園緑地. 63(1), pp.66~68., 2002年.
- 小室ゆめ・甲田菜穂子「ドッグランにおけるイヌと飼育者の行動」動物心理学研究. 59(1), pp.47~55., 2009年.
- 小室ゆめ・甲田菜穂子「ドッグランにおけるイヌの要注意行動」アニマル・ナーシング. 14(1), pp.1~5., 2010年.
- 澤井麻樹子「ドッグランにみる行政・愛犬家・住民の関係性」, 北野収編著『共生時代の地域づくり論-人間・学び・関係性からのアプローチ』, 農林統計出版, pp.207~236., 2008年.
- 塚本沙織「飼い犬とその飼い主による公園利用に関する研究」, 都市公園研究158, pp.95-103., 2002年.

- 三宅哲也「西日本高速道路(株)中国支社管内ドッグランの取り組みならびに鹿野SA(サービスエリア)の利用状況について」道路と自然. 35(4), pp.40～43., 2008年.
- 横松広一郎・藤崎健一郎「東京都および神奈川県都市公園内ドッグランの現状と課題」都市公園. 187, pp.75～78., 2009年.
- 吉田謙太郎・川瀬靖「都市公園におけるドッグラン整備に関する選択モデル分析 --Graphics と Text による選択肢集合の比較」都市計画論文集. 43, pp.679～684., 2008年.
- 依田久美「HAB(ヒューマン・アニマル・ボンド, 人と動物の絆)研究 ドッグラン施設における現状と課題」アニマル・ナーシング .12(1), pp.77～81., 2007年.